

巻頭言

生活とデリヴァティヴ

Life as a Derivative

板倉 壽郎

Toshiro ITAKURA

我々の生活は、環境に関する認識と、環境に対する行動とから成り立っている。その際この認識が、空間的には自分を中心にしたものになるのは已むを得ぬところである。星のかなたのことには一般には関心が持てない。すなわち生活における認識は本人（我）にとって「ここ」を中心とした認識である。

この認識は時間的にも今の自分を中心としたものとなる。過去は現在の記憶されているものとして存在するのであり、その意味でも現在の認識対象は現在でしかない。すなわち本人にとって「いま」を中心とした認識である。

したがって、我々の環境への認識は、常に自分を中心とした「ここ」、「いま」の認識であり、この制限が、将来に関する指針や生活設計などの未来に関することをどう判断するかを難しい問題とし、時にはひとりよがりな認識・判断となりがちな原因となっている。

さて、認識はどうであれ、我々は日々生活し、行動しなければならない。認識が十分でないからと言って行動を止めるわけにはいかない。行動しないこともひとつの行動であるからだ。そうすると、環境に関する十分な認識もないのに我々は生活・行動していると言うのか？

我々の生活している「ここ」の近傍の比較的認識のしっかりしている空間・対象を考えよう。これをひとつの系と考えるわけだ。この系内の対象に関しては比較的明確なモデルを構築でき、そのモデルを操作して系の時間変化・発展をシミュレーションできる。勿論この系は世界から独立したものではないので、このシミュレーションは誤差が多く、そう遠い未来までを予測できるわけではない。予測可能な時間範囲、すなわち「いま」から先の時間の長さ τ は、「ここ」近傍の空間の大きさ V に依存し制限される。認識の明確な空間の大きさ V が大きいほど予測可能な未来 τ は大きくなるのである。

人には頭のよしあしがある。それぞれの能力に応じて V の大きさが決まる。そしてこの V により τ も決まる。 τ が3ヶ月ならば、3ヶ月を単位とする生活の予定を立てなければならないだろう。これを私はインテグラルな予測・計画と呼んでいる。3ヶ月先までを見越しての計画である。しかし我々は目前の日々の対処もしなければならない。ディファレンシャルな対処である。3ヶ月先までの変化は「いま」からの時々刻々に予想される変化、すなわちディファレンシャルの積み重ねによってなされる。そしてこのディファレンシャルの積み重ねに基づく予測を、私はデリヴァティヴと呼んでいる。

人の生活はインテグラルとディファレンシャルどちらの考察をも必要とする。このバランスが大切である。これを結ぶものこそデリヴァティヴであろう。私が生活はデリヴァティヴという所以である。

(生活科学部学部長)